

温故知新

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2008.2 Vol.11

平成20年2月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
 〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
 TEL (053) 457-6124 FAX (053) 457-6125
<http://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

シャルトル大聖堂 ————— ①

■巻頭言

民俗芸能の危機と ————— ②
 図書館

文化政策学部 国際文化学科教授
 学生部長
 須田 悅生

■図書館散歩

J・ヒューストンの ————— ③
 自伝から

文化政策学部 文化政策学科
 教授
 池村 六郎

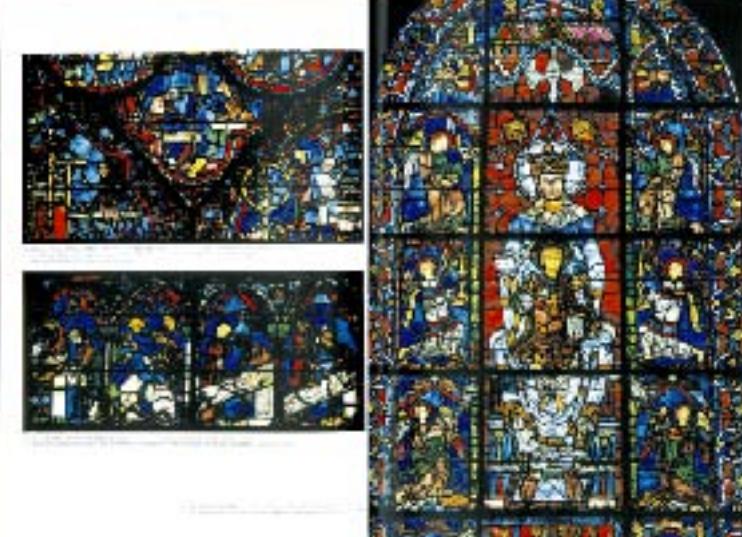
■〈シリーズ〉

図書館・情報センターを使いこなそう!

静岡新聞 ————— ④
 データベース編

木村文庫を ————— ⑥
 開設しました

本学教員の著作物



シャルトル大聖堂

全長130m、身廊天井高34m、フランス・パリ南西約80km。

飯田喜四郎、黒江光彦編「ゴシック1(世界美術大全集 西洋編 第9巻)」小学館、1994.[708.7/Se22/9]
 (左上)織機工、大工、車大工、樽造り、聖ユリウスの生涯の窓(部分) シャルトル大聖堂 周歩廊祭室 1220~25年頃 フランス
 (左下)石工と彫刻家、聖エベфонの物語の窓(部分) シャルトル大聖堂 周歩廊祭室 1220~25年頃 フランス
 (右)美しい絵ガラスの聖母 シャルトル大聖堂 内陣南側廊 1180年頃(?) フランス

「今日のヨーロッパにおける社会と文化、都市と農村、キリスト（ローマ・カトリック）教会の組織、大学等々一切の原型は、12世紀を中心とする前後200年、すなわち11世紀半ばから13世紀半ばにかけての時代に、その直接の出発点を持っている。ロマネスクもゴシックもこのときに開花した。一方は農村において。他方は都市において。農村の場合には、ローマ文化の継承者である修道院がロマネスクの文化を支えた。これに対し都市の場合には、商人、手工業者など富裕な都市民がゴシック文化を支え、さらに14~15世紀の中世後・末期に向かって発展させ、ルネサンス文化運動へと繋げていった。

農村・農民が活力と自信を持った、12~13世紀「農村の時代」における都市民は、ほとんどすべてが多かれ少なかれ故郷をはなれたよそ者であり、旅人であった。〔略〕よそ者、旅人としての孤独、緊張、不安感が付きまとう中世都市民にとって、何よりも必要であったのは、「安心」であった。そして、よそ者が安心して乗りあえ、互いに都市民であることを実感し合えた「乗合船」、それこそがゴシックのカテドラルであった。*

「各地の司教座のある主要都市に大聖堂が、その他の都市や農村に一般的な聖堂がつぎつぎと建てられ、いわばヨーロッパ全体に建築ラッシュが引き起こされた。〔略〕カテドラルは、光を求める、神を求める、未来に高い理想を掲げる、大きな可能性を見つめつつ、社会にダイナミズムを惹き起した中世キリスト教の、可視的な表現である。〔略〕ゴシック式カテドラルは、石で造られた森そのものである。〔略〕シャルトルのカテドラルのように、大きく丸いバラ窓や、細長い無数のステンドグラスからさしこむ色光は、木々のはざまから洩れる陽光に外ならない。〔略〕中世人は、都市という反自然的・合理的空間の中に石で森を作り、心の安らぎの場、帰るべき魂のふるさととして、森を求めて、森に恋したのであった。」**

* 木村尚三郎「大聖堂の時代：時代背景」「世界美術大全集9 ゴシック」小学館、1995.[708/Se 22]

** 木村尚三郎「カテドラルの文化」渡辺雄吉『ヨーロッパ教会物語』グラフィック社、1986.[293/W 45]



文化政策学部 国際文化学科 教授
学生部長
須田悦生
Suda Etsuo

文中に登場した図書

星野紘著
『世界遺産時代の村の踊り』
386.8/H92

民俗芸能の危機と図書館

外国文学を専攻している友人知人から時に言われることがある。「あなたの場合は原資料が皆国内にあるから羨ましいですね」。さらに、「印刷されているものが多いし」という発言が添えられることがある。実はその両方とも必ずしも当たっていないのだが、いわゆる「国文学」に対するその種の「誤解」は普遍的に存在するのかも知れぬ。

私の専門分野は中世日本文学、特に中世劇の発達に関する芸能環境、軍記や物語などの形成と伝承研究を中心としている。芸能史というマージナルなところに主たる関心をもった宿命から、全国各地へ（時には海外へも）出掛けて行って民俗芸能を見ることを、ここ四半世紀以上続けてきた。中央で大成された能・狂言、人形劇、歌舞伎とは別の道を歩んできた、「土の匂いのする芸能」は祭りの場で行われることが多く、日本文化の原風景を、いわば手づかみするという貴重な体験が得られるのである^{*1}。ムラの皆さんと深夜まで酒を酌み交わして祭りとムラの将来について語り合い、親交を結んだ感動も忘れない。フィールド研究の醍醐味といえよう。

祭祀や芸能の場ではどんな言葉が、いつ、どのように歌われ、語られるのか、それらはいかなる形で受け伝えられたかといった、心意のありように私は文学研究の立場からことさら注意を払ってきた。確かに、モトの資料は国内にはあるが、祭祀・芸能は日時・場所が限定され、そこはしばしば過疎の地になっているから、その地に足を踏み入れることはそれほど容易ではない。それに、歌や語りで活字になっているものはごく限られる。現場で収録し、古老から聞き取りをしなければならない。筆録された語りや歌詞があっても、個々人の心覚えでしかない。

地域の祭りの場は、ムラのお年寄りが、語りや舞い方から、祭りの伝承、進行の仕方に至るすべての情報を束ねる、図書館なのである。これはどの民族でも同じだろう。その「図書館」が今や日本では危機的状況にある。限界集落が増えると、信仰、食、生業などを含む地域の文化の総和である祭りの伝承力が古老とともに減退、消滅する^{*2}。せめてそれらを記録保存する努力ができるかと思うが、各地の公共図書館、歴史民俗資料館などに行っても、民俗芸能、祭祀儀礼の言語資料を克明に記録したものは滅多に見ることができない。観光資源としてDVD化すること（それもハイライトのみ）は熱心なのに、である。郷土資料室には公刊された地方誌・史はあるが、未刊のマニュスクリプトは収集対象外なのかあまり見当たらない。いったい、自治体が自分たちの足もとを照らすべき徹底したアーカイブズを作らなくてどうするのだろうか。

各地の集落ごとの共同体記録、祭礼ごとの神饌の製作や芸能の形態、伝承方法、参加組織（宮座）のありかたの記録等々については、先祖から伝えてきたものが集落で管理継承されていることが多い。それらはムラの図書館たる古の記憶と一体的に効果を發揮してきたのである。山里から人が消えるとともに記録も用済みとして廃棄されようとする。個人情報が存在するからというのだが、それは区分の仕方で対応が可能であろう。今、最も必要なことは公文書館からも排除されがちな民俗芸能を始めとする地域文化の文字資料を地域の図書館あるいは地方の大学図書館が率先して収集すること（原資料でなくてもよい）、と同時に消滅に瀕した芸能や民俗現象をまず、準備段階から周辺環境も含めて総合的に映像化することであろう。昔の映像と記憶があったから、一旦消えたあるムラの「王の舞」なる中世的芸能が復元、復活した例もある^{*3}。地域の図書館は、古の「図書館」ともども地域の文化の守護神であってほしい。

我田引水の物言いだと非難されるかもしれないが、多彩で豊饒な日本の文化を後世に伝える手立てを考えたいのである。日本の芸能や民俗・習俗は実は国際的で、獅子舞や神楽や年中行事は日本だけのものではない^{*4}。類似と相違を明らかにするためにも、資料が欠かせない。経済発展著しいアジア諸国でも祭りが廃れ、芸能が忘れられ、アイデンティティーが失われようとしている。光と影を抱えたわれわれは、アジアでの民俗文化の共同研究に協力していく資格があるのでないかと思う。

*1 「日本音楽叢書七 民俗芸能一」（音楽之友社、1990.7）が恰好の入門書。

*2 近刊の拙著「芸能と伝承の「場」を歩く」（三昧井書店、2008.3）においても述べたところである。

*3 「王の舞を見に行こう!」（福井県立若狭歴史民俗資料館、2004.10）参照。

*4 星野紘『世界遺産時代の村の踊り』（雄山閣、2007.9）が参考になる。

『日本の民俗芸能 調査報告書集成』全24巻（海路書院、2008.1）が完結、展望しやすくなった。年度中に6冊配架予定。



文化政策学部 文化政策学科 教授
池村六郎
Ikemura Rokuro

文中に登場した図書

ジョン・ヒューストン著
宮本高晴訳
『王になろうとした男
John Huston An
Open Book』
778.253/H98

J・ヒューストンの自伝から

お決まりのセリフで言うと、タフでなければこんな自伝は書けない。優しくなければこれだけ友人知己愛人と派手な喧嘩やしんみりした別れをあじわえない。アメリカ映画界の巨匠ヒューストン監督、74歳のときに出発した自伝である。1906年に生まれ、1987年に死去。若いころは連勝のボクサー、ダメな新聞記者、やがて小説や絵画に才能を發揮、膨大な脚本を書き、監督業のかたわら俳優・競馬狂。若いころ、かの二枚目にして乱暴者の大スター、エロール・フリンにからまれ殴り合いになり、鼻を折られたがフリンの肋骨を2本、折った。喧嘩は引き分けで両人とも、病院に。翌日、電話で「やあ、具合はどうだ?」「楽しんだよ、またやろうぜ」と、まるで西部劇そのままで。十数年後、晩年のフリンをつれてアフリカ・ロケもしている。

もう少し紹介すると、H・ボガートを世に出した『マルタの鷹』(1941)やG・ベック主演の『白鯨』(1956)の監督である。『天地創造』(1966)では監督のかたわら(箱船)の神に選ばれし人ノアを、ポランスキ監督の『チャイナタウン』(1974)では娘を死なせる破倫非道の権力者を演じた。いずれも、画面の表情が目に浮かぶ。自伝の邦訳タイトルは監督した『王になろうとした男』(1975)から。喜劇では何と言っても007・ジェームズ・ボンド物のパロディ『カジノロワイヤル』(1967)。晩年だと(ミュージカル)『アニー』(1982)の監督、『モモ』(1986)への出演。先祖はスコットランドの英雄だったらしい。

競馬狂である。ある時、ヒューストンは確かな情報つかんで大金搔き集め借りまくり(よんどころない事情があって)馬券買いは女房に託した。賭は図星で、まさにトーンでもない大穴。欣喜雀躍、大騒ぎして祝杯の用意をするはずがそうはならなかった。女房がどうしたのかというと、「ゴメンね、必勝マチガイ無し、と親切な人たちに助言されて別な馬(大本命)に賭けていたの…」というわけである。もちろん、ヒューストン、茫然自失・悶絶したものの、気を取り直して、今度は自分の度量の大きさに賭けた。「ああ、いいヨいいヨ、仕方がないさ」と応じていたのだが、女房が電話でいつまでも懸命に謝ったのがいけなかった。詫びの仕上げは「切れる」の始め、とうとう「△×?○…!ウスノロ女!」と怒鳴って、そのままグデングデンのヤケ酒に。教訓ひとつ。詫びるのも謝るのもほどほどにしないといけないらしい。せめて太っ腹なところを見せようという気分、残るのはそれのみという状況もあるのだから。

フランス語しか喋らない(しかも、延々と喋り続ける)ジャン=ポール・サルトルと2週間ものあいだ脚本作りに合宿しているくらいなので、屁理屈も得意だったようだ。急にサルトルの名前を出したが、とにかくこの自伝には有名無名の名前が次々に登場する。索引にあるだけでも、たぶん900人くらい。権勢を誇った大プロデューサー・ザナックが、「ヒューストンの才能や成功は羨ましくないが、あの友人の多さは妬ましい」(日本語訳「訳者あとがき」より)と語ったという、そんな深さと中身のある付きあいでいる。友人の多さというのも感心するが、子どものころ、一緒に遊んだ連中の名前やまわりのオトナたちの名前を、この歳でこれだけ覚えているというのも驚きである。私など、小学校4年生のころ、頬寄せ相手のイシネさんや拳骨相手のウチヤマ君の、その名前の方を思い出せない。

伯父アレックは心臓が悪くなり、回復の望みもなくベッドに横たわっていた。そこへ、はるばる大陸を横断して親戚の女性が見舞いに訪れる。「会いたくないね」と言い出す。「あの女は退屈だから。オレには一秒一刻が惜しい。もう、死んだと言ってくれ」「そんなこと言えるわけがないでしょ」「玄関に出て、戻ってみると、もう死んでいた、と言えばいい。オレは息を止めて死んだふりをするから」「あなた、心臓が悪いのにそんなことができるわけがないでしょ」…。結局、妻と娘は、親戚の女性をベッドに。女性3人、声を揃えて泣き崩れる。数日後、ほんとうにアレック伯父は死んだそうだ。死にそうな人を見舞うのは辛いものである。たぶん、見舞われる方にとっても。死者への弔問なら、気持ちが少しは澄んでゆく。死者の方はそれを聞けない。このエピソードは参考になる。モンダイは女房をいかに説得するか、である。

静岡新聞データベース編

「静岡新聞データベース」とは？

1988年以降の静岡新聞の記事内容をデジタル化したオンラインデータベースで、収録記事数は約160万件（2007年4月現在）にのぼります。

静岡県内の政治、経済、社会、学芸、家庭、スポーツなど静岡新聞の各面に掲載されている記事の全文が収録されているほか、静岡新聞の西部版・中部版・東部版のすべてのローカル記事も網羅されているので、静岡県内全域の行政の諸活動に関する情報や動き、過去の経緯を把握することができます。

情報収集や情報調査の支援ツールとして、積極的に活用してください。

図書館・情報センターが所蔵する静岡新聞の原紙保存期間は3年間です。図書館・情報センター1階の電動書架に所蔵しています。

※静岡新聞記事データベースは学内限定のデータベースで、学内であればどこからでも利用することができます。

ただし、一度に接続できるのは1名のみです。接続できない場合は他の人が使用中ですので、しばらく時間をおいてから再接続してください。

ステップ1



図書館・情報センターのホームページにある「オンラインデータベース」をクリックします。

ステップ2



オンラインデータベースから「静岡新聞データベース」をクリックします。

ステップ3



「静岡新聞データベース」をクリックしてログインします。

ステップ4



別ウインドウでメイン画面が開きます。ここでは記事検索の一例として、キーワードに「静岡文化芸術大学」と入力し、過去1年分の静岡新聞の記事を検索してみましょう。

〈シリーズ〉 図書館・情報センターを使いこなそう！⑪

ステップ5

検索結果が表示されます。[一覧表示]をクリックして記事一覧を見ます。なお、記事数が多すぎる場合は[再検索]をクリックし、条件を追加して絞り込むことができます。

ステップ6

記事一覧が表示されます。この中から「文芸大生自らがモデル」および「本音インタビュー=静岡文化芸術大学長・川勝平太氏」の記事を見てみましょう。

ステップ7

該記事詳細情報を表示します。

ステップ8

使用後は、必ず[ログアウト]をクリックしてから終了してください。

該記事詳細情報を表示します。

ステップ9

ログアウト確認画面が表示されて終了します。

2つの記事が一括表示されました。キーワードはハイライト表示されます。

ログアウト確認画面が表示されて終了します。

●木村文庫を開設しました

木村文庫について

「木村文庫」は、本学初代学長である故 木村尚三郎先生の、西洋中世史を中心とした、文化・芸術に関するコレクションです。ご遺族のご厚意により、本学図書館・情報センターに寄贈されました。資料数は、洋書（主に仏語）600余冊を含む、計5,155点です。

このほど「木村文庫」が図書館・情報センター1階に開設され、閲覧・貸出が可能となりました。内容は、木村先生の御著書をはじめ、洋の東西に亘る歴史書、「日本民俗地図」、「日本祭礼地図」といった資料類、雑誌「法制史研究」のバックナンバーから「懐かしの紙芝居」までと、幅の広いコレクションで、先生の深い教養と豊かな発想の源泉を垣間見る思いがいたします。

ご活用下さい。



木村尚三郎先生ご略歴

昭和5年東京都生まれ。昭和28年東京大学文学部西洋史学科卒業。昭和33年日本女子大学文学部助教授。昭和34年東京都立大学法学部助教授。昭和41年東京大学教養学部助教授。昭和51年東京大学教養学部教授。平成2年東京大学名誉教授。平成12年静岡文化芸術大学学長。

この間、関税・外国為替等審議会会長、国民生活審議会会長、しづおか男女共同参画推進会議会長、2005年日本国際博覧会（愛・地球博）総合プロデューサーなど、多数の要職を歴任。

交通文化賞（運輸省、平成2年）、横浜文化賞（横浜市、平成8年）、NHK放送文化賞（平成9年）などを受賞。

専門はヨーロッパ中世史、比較文明論など。

著書『ヨーロッパとの対話』（日本経済新聞社、昭和49年 / エッセイストクラブ賞受賞作）、『和魂和才のすすめ：ヨーロッパの知性日本の知恵』（日本経済新聞社、昭和54年）、『時代を見通す発想』（講談社、昭和62年）、『中世の街角で』（グラフィック社、平成元年）、『ふりかえれば、未来：歴史を読む明日を読む』（PHP研究所、平成4年）、『文化の風景』（日本経済新聞社、平成9年）、『日本の美風』（潮出版社、平成17年）など多数。



本 学 教 員 の 著 作 物

孫 江(著) 国際文化学科准教授	『近代中国の革命と秘密結社(汲古叢書72)』 汲古書院、2007.3	222.07/Sa41
望月達也(著) メディア造形学科教授	『XVLによるエンジニアリングWeb3Dアニメーション入門』 森北出版、2007.4	501.8/Mo 12
坂本光司(著) 文化政策学科教授	『選ばれる大企業、捨てられる大企業—中小企業とのWIN:WINの関係を構築せよ』 同友館、2007.6 『大切な人に伝えたい 私の心に響いたサービスリピーターを呼ぶ感動サービス(2)』 同友館、2007.12	335.21/Sa 32 673/Sa32
馬 成三(著) 国際文化学科教授	『現代中国の対外経済関係』 明石書店、2007.11	332.22/Ma11